

【A年】

聖霊降臨後第十七主日

特定二十

あわれみ深い全能の神よ、どうか主の豊かな恵みによって、すべての害あるものから守って下さい。からだと魂とに備えをし、あなたのみ心の思いを喜んでなし遂げることができまますように、父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

司祭 「聖書のみ言葉を聞きましょう」

会衆は着席する。

旧約聖書

朗読者 「旧約聖書はヨナ書第三章十節から」

10 神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、

思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。  
1 ヨナにとつて、このことは大いに不満であり、彼は怒った。  
2 彼は、主に訴えた。

「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かつて逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっています。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。  
3 主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きていますよりも死ぬ方がましです。」

4 主は言われた。

「お前は怒るが、それは正しいことか。」

5 そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起るかを見届けようとした。

6 すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。7ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。8日が昇ると、神は今度は焼くような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。

「生きていますよりも、死ぬ方がましです。」

9 神はヨナに言われた。

「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか。」  
彼は言った。

「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」

10 すると、主はこう言われた。

「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。11 それならば、どうしてわたしが、この大なる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

朗読者 「旧約聖書を終わります」

## 詩編

腰掛けたままで、一節ずつ交互に唱えます。

### 第一四五編 八節〜十三節

8 主は恵みと憐れみに満ち＝ 怒るに遅く、慈しみ深い  
9 主の恵みはすべてのものに及び＝ 慈しみは造られた

すべてのものの上にある

10 主よ、造られたすべてのものはあなたをたたえ＝ 忠実

な僕たちは感謝して歌う

11 彼らはみ国の栄光を語り＝ 力あるみ業を告げる

12 人の子らはあなたの力あるみ業と＝ み国の栄光を知  
るようになる

13 あなたの国は永遠の国＝ あなたの支配は世々に及ぶ

## 使徒書

朗読者 「使徒書はフィリピの信徒への手紙第一章二十一節から」

21 わたしにとつて、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。22 けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。23 この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。24 だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもつと必要です。25 こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。26 そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあな

あなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。  
27 ひとすべからキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によつてしっかりと立ち、心を合わせ福音の信仰のために共に戦つており、28 どんなことがあつても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。

朗読者 「使徒書を終わります」

一同立つ。

ここで聖歌を歌う。

## 福音書

司祭 「主は皆さんとともに」

会衆 「また、あなたとともに」

司祭 「聖マタイによる福音書第二十章 一節以下に記された主イエス・キリストの福音。 主に栄光」

会衆 「主に栄光がありますように」

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行つ

た。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送つた。3 また、九時ごろ行つてみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやるう』と言つた。5 それで、その人たちは出かけて行つた。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行つてみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言つた。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言つた。8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払つてやりなさい』と言つた。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取つた。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思つてた。しかし、彼らも一デナリオンずつであつた。11 それで、受け取ると、主人に不平を言つた。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中を同じ扱いにすることは』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたにはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取つて帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払つてやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

16 このように、後あとにいる者ものが先さきになり、先さきにいる者ものが後あとになる。

司祭 「主しゅに感謝かんしゃ」  
会衆 「主しゅに感謝かんしゃします」